日本体育大学紀要 35 巻 2 号 (2006) 147-158

[原　　著]

# 日中太極拳交流史に関する研究

## —「簡化二十四式太極拳」の誕生から日本への太極拳移入の経緯について—

李　　自　力*

(2006 年 10 月 31 日受付，2006 年 2 月 13 日受理)

# Study of Historical Interaction of Taijiquan between Japan and China

## —Birth of 24 Simplified Form Taijiquan and Background to Introduction of Taijiquan in Japan—

ZiLi Li

The purpose of this study is to explain, in a historical perspective, the active interaction of taijiquan. In addition, it clarifies in details when and how taijiquan was introduced, and how it influenced on Japan Wushu Taijiquan Federation (JWTF), after the normalization of China-Japan diplomatic relations in 1972.

The interaction of taijiquan had already started before China-Japan diplomatic relations were normalized. "24 Simplified Form Taijiquan", promoted by the Chinese government as a notional policy, was first introduced to the Japan trade delegation when they visited China for the ratification of their trade agreement.

The government of People's Republic of China made numerous improvements to the traditional taijiquan and created a new one, "24 Simplified Form Taijiquan", under the leadership of Chinese Communist Party.

Contrary to the traditional martial arts, practiced by the bourgeoisie, it was targeted to the grass roots. Long-term efforts were required for the liberation of the old martial arts and also for the birth of "24 Simplified Form Taijiquan". The government studied ethnic sports and finally established China Wushu Federation and Wushu Management Center for the purpose.

Such efforts led to the creation, popularization, and success of "24 Simplified Form Taijiquan" and formed the basis of the interaction of taijiquan between both countries.

Under the circumstances, both countries established their diplomatic relations, and taijiquan interaction along with various other cultural ones flourished. Owing to the normal diplomatic relations, people were allowed to visit each other. So various cultural interactions became more and more brisk.

As "24 Simplified Form Taijiquan" was introduced to Japan, Japan Taijiquan Association was soon established. This triggered for the popularization of taijiquan in Japan.

**Key words**: taijiquan, wushu, interaction of taijiquan between Japan and China

**キーワード**: 太極拳，武術，日中太極拳交流

* 大学院体育科学研究科博士後期課程　スポーツ文化・社会科学系

## I. 本研究の意義と課題

本研究は，日中両国間における太極拳[1]の交流について，いかなる経緯を経て今日に至っているかを，次の三つの視点から考察・検討しようとするものである。すなわち，第一に新生中華人民共和国における「簡化二十四式太極拳」の誕生とその背景，第二に新しい時代にふさわしい統一組織としての中国武術協会の結成に至る経緯をめぐる問題，そして第三に日中太極拳交流の始まりと太極拳ブームの到来，の3点に焦点を当てる。いずれも重要なテーマであるが，なかでも日中国交正常化(1972年)[2]以後の日中両国の太極拳交流には特に注目したい。具体的には，中国で新しく誕生し，今日広く世界で太極拳の基礎種目となっている「簡化二十四式太極拳」がどのような経緯を経て日本に移入されることになったのか，そしてそれがどのようにして日本に受容され，太極拳ブームを生むことになったのか，その経緯を明らかにすることを本研究の目的とする。

日中太極拳交流史に関する研究は，管見ながら日中両国ともに極めて少ない。特に日中国交正常化以前の日中太極拳交流に関する中国側の文献や資料は，「文化大革命」[3]による政治情勢の不安定期にほとんどが破棄されたり，あるいは行方不明となっており，この時期の動向を裏づける史・資料はほとんど入手できないのが現状である。最近になって，ようやく中国の研究者による日中太極拳交流に関する研究が行われるようになってきたが，それらはまだその緒についたばかりで，本格的な研究はこれからである。例えば，中国福建省公安専科学校助教授の高婭による「日本における当代太極拳運動の発展—日本武術太極拳連盟を中心に」(中国四川省成都体育学院学報，第29巻，2003年第1号)は，日本の太極拳運動の発展と連盟の関係を簡明に説明したものにすぎず，日中の太極拳交流についてはほんのわずかなページを割くにすぎない。

また他の資料も，そのほとんどが中国武術史，太極拳史の中でごく簡単に日中の太極拳交流について触れている程度である。したがって，ここで扱おうとする時期，すなわち，日中国交正常化前後の日中太極拳交流の始まりとその経緯について全体的，総合的に研究されたものは見られない。一方日本には，第二次世界大戦後から現在に至るまでの日中太極拳交流に関する文献は少なくない。しかし，それらの大半は，日中国交正常化以後の日中太極拳交流に関するもので，大戦の終了から日中国交正常化(1972年)までの間の日中太極拳交流に関する著書は，管見ながら，存在しない。

日中国交正常化以後になると，太極拳そのものについて記述する文献が急増する。例えば，三浦英夫の『太極拳健康法』(立風書房，1979年)，楊名時の『太極拳　健康は日々の積み重ねが大切』(文化出版社，1986年)，笹島恒輔の『中国の体育スポーツ史』(ベースボール・マガジン社，1987年)，笠尾恭二の『中国武術史大観』(福昌堂，1994年)，前野慈作の『日本人のための太極拳入門』(民衆社，1995年)，李天驥の『太極拳の真髄』(BABジャパン出版局，1997年)などがある。これらの著作はいずれも別の目的で著されたものばかりで，日中の太極拳交流の歴史過程に焦点を当てたものではない。

そんな中で，日本中国友好協会[4]の太極拳委員会の『太極拳普及20周年記念誌』—1977年から1996年まで(日本中国友好協会，1997年)，は唯一日本における太極拳の普及についてその歴史過程を伺うことができる文献である。しかし，それでもなお，本研究が目指すような日中太極拳交流史の問題点を解き明かすという点では十分とは言えない。なぜなら，日中国交正常化前の「簡化二十四式太極拳」の誕生をめぐる諸問題やそれに伴う組織の問題など，中国側の太極拳の動向に関する議論については，ほとんど何も触れていないからである。

以上のように，日中太極拳交流史に関する研究はまだその緒についたばかりであり，本格的な研究は皆無と言ってよい。したがって，本研究では，「文化大革命」の影響によって中国側の資料が著しく乏しいという厳しい条件のもとではあるが，現段階で蒐集可能なすべての資料を駆使して，まずは日中太極拳交流史骨格を明らかにしようとするものである。これが本研究の意図であり，その意義は極めて大きいと考える。

本研究で用いる主な資料は，先に検討した先行研究に加えて，以下の機関誌，協会・連盟の「議事録」，および「聞き取り」(日中友好協会関係者，日本太極拳協会関係者，太極拳友好会関係者，日本武術太極拳連盟関係者，武術太極拳のベテラン経験者，在日中国人武術家・武術研究者など)調査の結果，新聞・雑誌などである。なお，協会・連盟の「議

事録」については，資料としての特性上，事実関係の確認程度に用いるという限定つきであることをお断りしておく[5]。「聞き取り」調査に関しては，実に多くの方々のご協力を得て，豊富な情報を得ることができた。それでも，記憶には誤りは避けがたいので，必ず「ダブル・チェック」をかけた上で信頼性の高い情報だけを本研究では用いることにした。なお，当然のことながら，以下の機関誌と著書は本研究にとっては極めて重要な資料として位置づけられる。

1. 日本武術太極拳協会編『太極』機関誌（1972年創刊）
2. 日本武術太極拳連盟編『武術太極拳』機関誌（1987年創刊）
3. 徐才著『徐才武術論文集』人民体育出版社（1995年11月）

## II. 「簡化二十四式太極拳」の誕生とその背景

### 1. 中華人民共和国の成立とスポーツ政策の転換

1949年10月1日，中華人民共和国が誕生した。新政府は直ちに体育組織を結成し，新たなる体育政策が発表された。その第一番目が国民の健康と体位向上のための“新民主主義的国民体育”の提唱であった[6]。すなわち，「ブルジョア的国民体育」を解体し，それに代わる労働者・人民のための国民体育の推進を高らかに掲げることだったのである。つまり，ここでいう「国民」とは共産主義社会の主役を演ずることになる労働者・人民のことを意味する。しかし，この考え方が浸透していくには若干の準備期間が必要だった。

1952年6月20日にようやく開幕した中華全国体育総会（現中国国家体育管理センター）設立大会は，6月24日成功裏に閉幕を迎え，中華全国体育総会設立の勝利宣言を行った。大会に先立ち，「大衆性日常的スポーツ事業」[7]の展開を記念した激励の言葉として，毛沢東は「発展体育運動，増強人民体質」（体育運動を発展させ，人民の体位を高めよう）という言葉を送った。大会では毛沢東のスポーツ振興に関する指示を遂行するために，数年来の実践経験をまとめ，「国民のためのスポーツの普及と日常化に努力する」を合言葉とすることが宣言された[8]。

国民のためのスポーツの普及と日常化を推進するためには，現実を的確に見極め，実態を精確に把握しなければならない。新中国の建設は始まったばかりで，その上国土は広大であり，状況も大変複雑である。加えてスポーツ事業の基盤は脆弱であったので，新しいスポーツ事業の展開には焦らず着実な進行が必要であった。同時に革命の精神と方法を積極的に取り入れ，各地域の状況に則し，各階層の人々の生活や，仕事の種類や内容，要求などに密着した，手軽に楽しめるスポーツ種目の普及を目指すこととなった。たとえその種目が多少稚拙であっても，心配する必要はなく，「金をかけない，かからない」を原則に，活動を展開できるような条件作りをして，今ある基盤の上に国家経済を建設し，国民の物質的文化的生活を向上させるよう努力が求められた[9]。

その時点での条件はまだ決して十分なものではなかったが，それでもスポーツの科学的分析と研究に真剣に取り組み，国民がスポーツ活動を通じて，健康の保持・増進や身体の体位・体力・体質の向上など，現実的で実際的な効果を実感できるような努力をしていくことが当面の課題として掲げられた。

### 2. 新スポーツ政策の基本方針

中華人民共和国成立後のスポーツは政府指導のもと，多方面からの積極的な支持を得て大きな発展をみせた。とりわけ，新中国成立後の数年は，政府の配慮と指導，関係各機関および団体の積極的支持と関係者の努力によって，スポーツは徐々に新しい国民の間に浸透しつつあった。中華全国体育総会は積極的にその準備活動を進める一方，国民のスポーツ活動の推進のために必要な事業を展開してきた結果，次のような四つの大きな柱となる成果を収めることができた[10]。

(1) 国民（大衆）スポーツ普及のための宣伝事業の展開。
(2) スポーツの大衆化の推進。
(3) 各種スポーツ団体の設立と指導者養成。
(4) ソ連をモデルにして学ぶこと。

そして，今後のスポーツ事業に関する方針と果たすべき役割について，中華全国体育総会は，スポーツを新民主主義教育の中の一つの科目であるとし，スポーツは人間の肉体の健全な発達に有効なばかりでなく，勇敢さや機敏さ，忍耐強く物事を前向きに考えることのできる精神，団体主義の精神などを養うのに優れており，国家建設，祖国防衛，生産労働，その他各方面の事業の展開にも非常に大きな意義を

もっている，という明確な方向を示すことに成功した。さらに，これらを実現に導くために全国各地の学校，工場，軍隊，農村など末端の組織において，日常的かつ大衆的なスポーツ活動を大々的に展開することを決定した[11]。

こうした明確な基本方針が定まったことによって，様々なスポーツ活動が全面的に展開されることになり，例えば，国民の健康の保持・増進に有益で，手軽に楽しめるスポーツが提唱されることになった。なかでも，大衆に馴染みが深く，好まれていた民族スポーツ，すなわち，武術＝太極拳が取り上げられることとなった。その理由は，第一に，特別な道具も場所も必要がなく，いつでも，どこでも実施が可能であること，第二に，老若男女，個人・団体を問わず，だれでもできること，第三に，ゆっくりとした動きでありながら運動量は大きく，健康の保持増進に役立つこと，などによる。

### 3 武術の解放と「簡化二十四式太極拳」の誕生

先の中華全国体育総会が提起した注目すべき問題提起の一つに，民族スポーツ（＝武術＝太極拳）の採用がある。しかし，これを実際に普及させるためには，科学に基づいた合理的方法により，洗練されたものだけ残す処理を施さなければならなかった。新中国建国以前まで続いてきたような，大金持ちたちが武術家をお抱えの用心棒として雇ったり，旧支配階級が武術を利用して人々を支配するという時代は終わった。今や，武術は労働者たちの健康の保持・増進，精神修養，団体精神の涵養，文化的娯楽活動，国防と生産の手段となり，大衆スポーツ活動の主役としての展開を開始した。

こうなってくると，こんどはいかにして武術を健全な方向へ導き，身体鍛練のための実用的価値と優美な芸術的価値を高め，大衆スポーツとして確立するという，さらに大きな役割を担うことが新たな課題となった。

民族（民族特有の表現形式）スポーツを推進するための既定の具体的方針は，「調査研究，発掘整理，大々的な宣伝活動，着実な発展」であった。実践に当たっての基本的な整理と，整理の原則下での普及，そして，整理と普及との統合は，中華全国体育総会の方針である「実際情況との結合，大衆スポーツの発展促進，ならびに普及と日常化」の精神と合致するものであった[12]。1953年11月8日～12日，天津市で開催された「全国民族スポーツ表演および競技大会」は，中国の有史以来，民族的スポーツが初めて一堂に会した大規模な検閲会であった。なかでも，悠久の歴史を持つ武術は最も豊富な演目を数えた[13]。

こうして，中国における武術は，歴史的伝統と広範な大衆の基盤をそなえていることが実証された。加えて，毛沢東の「体育運動を発展させ，人民の体位を向上させよう」「体操，球技，マラソン，登山，水泳，太極拳をはじめ，様々な体育活動を行うこと，つまりは，できるものなら何でもやるよう提唱しなければならない」という偉大な呼掛けのもとで，「古いものを打ち捨て，新しいものを打ち出し，古いものを現代に用いる」という原則に基づいて武術の研究と整理を行い，はつらつたる展開と喜ばしい成果を収めることとなった[14]。

毛沢東と中央政府の管理のもとに，政府の体育関係部門では，武術の専門家を組織し，長期にわたって，調査や整理に当たらせ，新しく統一した太極拳の構築の任に当たらせた。つまり，各流派の特徴や風格をとどめてはいるが，その動作を統一し，標準的な拳法を編み出すということである。これをきっかけに1956年，国家体育委員会は従来の楊家太極拳の型を整理・簡略化し，広範な大衆の需要に応えるために，「簡化二十四式太極拳」を制定した。これは，かつてブルジョアによって占有されていた武術の解放を意味し，同時に，流派武術からの解放をも意味し，中国における武術の新時代への大きな転換点をなすものと言ってよいだろう。その結果，多くの労働者，農民，兵士，大衆および，青少年が，「簡化二十四式太極拳」を享受することができるようになったのである[15]。

しかし，ここに到達するまでにはいくつかの難関があって，それらを一つ一つ克服していくための地道な努力がその陰に隠されていたことを忘れてはならない。こうした経緯についての研究は今後の課題としたい。

## III. 中国武術を統括する団体の設立と整備

### 1. 民族スポーツ研究会の設立

1949年10月に開催された中華全国体育総会設立準備会議の席上，朱徳[16]は政府が示したスポーツ活動のうち，トラック競技種目と球技以外の，民間

に伝わるいろいろな形式のスポーツを広範に採用すべきとの見解を明らかにした。1952年，中華全国体育総会は関係者を集めて，今後の武術事業活動の展開方法等を話し合う座談会を北京で開いた。同年に行われた第2回中華全国体育総会代表者大会においては，栄高堂[17]が，大衆の間に深く浸透し，愛好されている武術などを注目すべき重要なスポーツ種目として再度提出した。そして，こうした民族スポーツの発掘，整理，普及などの活動を担当する国家体育委員会が民族スポーツ研究会を設立した。

武術の着実な普及と民族スポーツの振興のために，国家体育委員会は，1953年11月，天津市において，初の「全国民族スポーツ表演大会・競技会」を開催。新中国成立初期の武術水準が最高のレベルに至ったことを見せつけるとともに，新中国の武術発展に大きな一石を投ずることとなった。こうして，新中国初期の武術活動は政府の大きな関心と提唱，支持と組織化の下，また全社会の熱心な参加を得て，急速に展開を始めた[18]。しかし，当時の社会における政治状況は大変複雑で，武術の復活と発展の過程においても大きな混乱が生じてもいた。一部の武術団体は団体としての登録を行わず，私的に結成したものもあり，あるものは封建的な迷信を操って社会秩序を乱したり，また金銭を騙し取るものも現れたりした。こうした事態を重くみて，1955年全国体育事業会議で武術事業を暫時縮小し，立て直しを図る方針を決定した[19]。

**2. 中国武術協会の設立**

こうして一定の整理，粛正の時期を経て，正常な活動を行うものと，武術を利用して政治を妨害しようとするものの区別がつけられ，はっきりとした線引きが行われた。1956年3月9日，劉少奇[20]は国家体育委員会の責任者との懇談会で，「我が国伝統の武術や気功などに関する研究の強化と改革を行い，これらの科学的有効性の研究を進めるとともに，いろいろな手段を講じて，人々に伝え，普及すること」を指示した。この指示に従って，武術は研究と改革の進行とともに弛みなく新しい発展をし続け，さらに，全国的な武術の統一管理のために1958年9月に「中国武術協会」が設立された[21]。

中国武術協会の組織と役割は以下のとおりである。各レベルの武術協会はそれぞれの体育総会に属する単体の組織であり，コーチ委員会，審判委員会，科学研究委員会，宣伝委員会などで構成され，全国の武術関係者の団結を図り，武術の継承，発掘，研究，武術遺産の整理，大衆武術の広範な普及活動，技術水準の向上のための努力，科学的研究活動の推進，武術の競技のための表演規定の研究と採点基準の決定などのほか，全国競技大会の開催や審判員，コーチの等級審査検定などである[22]。

このようにして，中国武術協会はその組織と役割を明確にし，制度的な改革を推進するとともに，1990年4月，国家体育委員会は「中国武術協会の実体化についてのコミュニケ」を発表した。すなわち，中国武術協会はこれまでの実績が認められ，名実共にその実体化が認知されたのである。そのことを受けて，中華全国体育総会の団体会員となり，また国家体育委員会直属の事業機関として，行政的権限が与えられることとなった。

以上が，中国武術協会が設立されるに至る経緯である。

**3. 武術管理センターの設立**

中国武術協会成立後，国家体育委員会の要請により，地方の武術協会組織が，まず各省，自治区，直轄市で順次結成され，ついで地方都市，県レベルに広がっていった。特に1982年の全国武術事業会議では，各省，自治区，直轄市および武術伝統の地域，市，県などに武術協会を設立するか，または復活させるなどの措置を取るよう明確に指示され，各地の武術協会の組織化が着実に進展し，ついには全国的ネットワークシステムが完全に一体化する運びとなった。

統計によれば1983年には全国27の省，市，自治区で県レベル以上の武術協会組織は2,000近くになり，数あるスポーツ協会のなかでもそのトップに踊り出た[23]。しかも，その中のいくつかのスポーツ協会は国家体育委員会に所属しないものも含まれている。これらことを考えると中国武術協会の組織が，いかに大きな組織であるかということが明白になるとともに，国家体育委員会に直属するスポーツ団体の中でも極めて重要な組織として認知されてきたか，がわかる。

さらに，1986年には国務院の認可を受けて，国家体育委員会武術研究院が正式に誕生し，翌1987年には国家体育委員会はこれまでの武術処をすべて武術院に統合し，統一管理の下に全国の武術事業と

対外普及推進活動を繰り広げた。さらに，90年代に入ると中国のスポーツ体制の制度改革が進み，武術活動は新しい発展の兆しを見せ始めた。こうした動向を受けて，さらなる管理体制を強化するために，中央人民政府の批准を経て，中国武術協会の実績を見据えた上で，国家体育委員会「武術管理センター」が設立された。この新しく設立された武術管理センターは国家体育委員会武術研究院の別称で，中国武術協会の常設執務機構でもある。このことは，行政上の有利な条件を十分に活用して広く資金調達の道を拓くこととなった。かくして，武術発展のための蓄財も，武術管理センターの当面の最も重要な事業の一つとなった[24]。

このようにして，中国国内における太極拳の普及・発展のための組織化がほぼ達成されることになった。このことは，同時に日本との太極拳交流というさらに大きな事業を展開していく上でも大きな役割を果たすことになった。あるいは逆に，日本における太極拳が急速に浸透し，日本の太極拳人口が急速に増大し，それに伴って太極拳の組織化（全国組織の団体の結成など）が進展する日本の実情に刺激を受けて，中国国内の太極拳の組織的整備が進展したとも考えられないことはない。

以下には，その実態について考察を進めてみたい。

## IV. 武術太極拳の日中交流の始まり

### 1. 日中太極拳交流の始まり

日本と中国，両国の文化交流ははるか昔に端を発し，久しく行われて途絶えることがなかった。ところが，不幸なことに近代に入ってから，あの忌わしい戦争によって，古くから育まれてきた友好関係は一瞬のうちに崩れ去ってしまった。その後，1972年までは，以前のような正常な国交関係が回復されることはなかった。しかし，そのような中でも民間レベルの交流を中心に友好関係の再建と正常化促進の気運は高まり，しだいに両国の有志者にとっての念願がかなえられる情況が生れてきた[25]。

日本における太極拳の歴史はわずか40年程度にもかかわらず，日中間の太極拳交流がいつから，誰によって始めたられたのかを具体的に実証する文献史料は今のところ存在しない。関連史料の記載によれば，日本の太極拳の歴史は，日中国交回復に大変尽力した二人の政治家 松村謙三[26]，古井喜実[27]を抜きには語れない。

1959年10月新中国成立10周年を迎えた際に，松村謙三を団長として古井喜実らで構成された日本貿易代表団が北京を訪問し，周恩来元総理の盛大なる歓迎を受けた。その際松村謙三は中国太極拳を学びたいとの希望を申し出たところ，周恩来総理は快く承諾し，「太極拳が中日国民のお役に立ち，また日本の国民の皆さんに幸福をもたらすことができるのでしたら，嬉しい限りです」と暖かい励ましの言葉をかけ，太極拳の手ほどきをしてくれる先生を紹介したのである。それが李天驥であり，それ以後，太極拳を通しての交流が生まれるようになったという[28]。これが日中太極拳交流の嚆矢であった。しかし，この段階ではまだ極めて個人的な興味関心に基づく太極拳の日中接触にすぎず，具体的に，国を挙げての太極拳の日中交流が本格的には始まるにはまだいくつものハードルを乗り越えなければならなかった。

### 2. 簡化二十四式太極拳の移入と日本太極拳協会の設立

その後，日中貿易交渉，国交回復交渉のために度々訪中した古井喜実はその度李天驥に指導を受けた。そして，簡化二十四式太極拳の図解テキストをもらい，帰国後翻訳して，個人的な刷り物として関係者に配布した。こうして中国の太極拳は，まずは簡化二十四式太極拳が手がかりとなって，日本のなかに愛好者を増やし始めた，というのが，当初の実態である。そして，1969年には，日本太極拳協会が設立され，日本武道館にその事務局が置かれた。古井喜実は自ら初代会長となり，日本武道館を拠点に日本における太極拳の普及活動に本腰を入れて取り組むこととなった[29]。

古井喜実は，日本人の健康，体力づくり運動を提唱して，健康づくり，体力作りの見地からみて，太極拳がとても優れていることに気づき，これを何とか普及したいと考えた。またさらには，この普及を通じて日中友好を促進することを提唱した[30]。しかし，1972年日中両国国交正常化以前の日中間の往来は難しく，これは極めて困難であった。特に，中国の武術家たちをその時期に日本に招聘することは不可能であった。

1972年，日中国交正常化が達成され，日中友好

の新時代が開かれた。かくして，日本太極拳協会を中心として中国との本格的な太極拳交流が始まった。

## V. 日中太極拳交流の進展

### 1. 日中国交正常化以後の日中太極拳交流の展開

日中国交正常化は，これまでの日中太極拳交流の妨げとなっていた諸々の条件を取り除き，民間レベルでの交流を一気に活性化することになった。その日本側の主たる窓口となったのは日本太極拳協会であった。しかし，最初の交流はこれまでの実績に基づき，日中友好協会が音頭をとった。これが，1974年2月の「日本体育専門家訪中団」の北京派遣である。この集団は文部省の体育関係の役人による視察を中心としたものであった[31]。まずは，文部省の役人に中国における太極拳事情を理解してもらおうというところに主眼があった。しかし，この中に，ただ一人，太極拳の専門家で，のちに日本の太極拳の発展に貢献することになる中野春美[32]が参加していた。

第二回目からは，太極拳を「学習する集団」を中国側が招待する，という形で交流が進展している。その第一次「訪中学習代表団」が1974年6月に，そして，第二次が1975年10月，第三次が1976年11月，という具合に続く。およそ，年に1回というペースで，中国側が日本の学習代表団を招待していることがわかる。つづいて，1978年1月には「太極拳友好之翼」という団体を組織して，15日間にわたる太極拳の習得と観光が自費で行われている。この団体がのちに物議をかもすことになり，日本の太極拳団体がいくつにも分裂していく原因となった[33]。さらに，1978年7月には「上海学習特訓団」が中国に派遣され，第二次（1979年3月），第三次（1979年7月），第四次（1981年5月）と続く。これは，日本の太極拳の指導員レベルの人たちが集まり，自費で上海を訪問し，特別の指導を受けるというものであった。こうして，徐々に日本の太極拳の技術も高まり，しだいに自立の道を探り始める。

また，1981年7月には，北京体育学院（現，北京体育大学）で太極拳を習得しようという第一次「学習団」が組織され，第二次（1982年3月），第三次（1983年4月），第四次（1983年6月）と続く。こうした流れの中で，片野隆夫[34]は1984年3月～4月にかけて北京体育学院に留学をし，太極拳の研鑽に励んだ。

こうした日本側の努力は少しずつ実り始める。その嚆矢となったものが，1984年4月23日から26日にかけて開催された湖北武漢市国際太極拳大会であった。この大会で，日本の潮田強が「簡化二十四式」で第1位，野口敦子が「陳式」で第2位という成績を収めた[35]。こうした朗報は日本の太極拳愛好者たちを大いに奮い立たせ，のちに起こる日本の太極拳ブームの一因となったことは間違いないだろう。

1985年3月には，勝部典子と依田純一が北京体育学院に留学。そのほかにも，多くの太極拳愛好者が個人のレベルで，北京体育学院や河南陳家溝[36]，そして少林寺[37]などの各地に太極拳を学びに出かけている。この傾向はこれ以後ますます増大し，日中太極拳交流は順調に軌道に乗っていった。以上が，日中国交正常化以後の約10年間にわたる日中太極拳交流の概略である。

このことから明らかになってくることは以下のとおりである。

日中国交正常化の直後にあっては，日本側からは中国における太極拳の現状視察を主目的とする「訪中団」が派遣され，その熱意に応えて，太極拳を学ぶための「学習団」が中国側から招待されるようになる。次いで，日本側からは主体的に太極拳を学習しようという指導者クラスの「特訓団」が上海を訪れる。更には，北京体育学院に留学して太極拳を学ぼうとする者が現れ，着実にその実力を高めていく。そして，1984年には国際大会で上位入賞を果たすにまで至る。このようにして，日本の太極拳ブームはお膳立てされた。

### 2. 太極拳の日本への移入と太極拳ブーム

以上のように，国交正常化以来日中間の太極拳交流は非常に盛んになったが，この段階での太極拳交流は日本から中国を訪問し，ひたすら太極拳の指導を受けるというのが実情であった。こうして，日本の太極拳愛好者たちが中国で直接太極拳の指導を受けるようになると，その帰国者を通して太極拳の技術指導問題が活発に議論されるようになった。やがて日本太極拳協会内に指導委員会を設置され，技術指導の基本原則は一切の日本的自己流技術を排し，中国武術協会制定の各式太極拳，剣，刀，棒，槍な

どを採用，伝統拳も楊式，陳式の正統拳を学習するなどが決定し，1976年7月3～7日の第一回全国講習会（主催：日本太極拳協会おける東京代々木のオリンピック青少年センター）の開催を皮切りに今日に至るまで年に1回の講習会が同所で行われている。参加者も第一回45名[38]，第二回75名[39]，第三回130名[40]，第四回125名[41]，第五回227名[42]，第六回461名[43]…と増え続け，この間実技の講習だけにとどまらず，指導員養成講座，指導要領の確立，地方での学習会の整備などについても，熱心に検討を行ってきた。

その間，太極拳の日本国内での学習熱はしだいに高まり，各地に同好会，地区細胞が出現し，北海道，東北，関東，名古屋，大阪，福岡には，それぞれのブロック支部組織が結成されて，学習会員の数も大幅に増加していった。しかし，70年代の中期，中国国内に大きな政治変化が起こり（文化大革命），やや太極拳交流の機会が遠退いた感もあった。とはいえ，そのような中にあっても明るい話題も生れた。日本国内では訪中学習団による技術習得を基礎に各コーチの養成，全国各地区組織の強化を図り，全国太極拳の中央集会が計画されるようになった。1976年7月，第一回全国夏期講習会が東京代々木のオリンピック記念青少年センターで開催された[44]。一方，1970年代になると中国の国連復帰，米中国交回復，1972年以降日中国交正常化に伴って両国間の文化交流は急速に発展，中国の国際的威信が高まり，日本でも中国ブームが起こった。

70年代後期から80年代前期にかけてテレビには中国モノを題材にしたCMや紀行番組が流れ，また1973年12月ブルース・リーのカンフー映画「燃えよ・ドラゴン」が人気を博して，多くの日本人が太極拳を含む中国武術に興味をひかれていった。このような追風を受けて太極拳は全国各地で展開された日中交流活動を通して確実に浸透していった[45]。

やがて，中国から武術代表団が来日するようになり，日本の各地で太極拳と中国武術を紹介したのもこの頃である。この時期には全国各地で太極拳と中国武術の団体が次々に誕生し，各地の団体は，それぞれに学習訪中や中国武術家の招請を熱心に行った。なかでも，各地の日中友好協会による，中国との友好都市交流を通じて，中国の各地で太極拳を学び，日本各地で普及させるという方法は，極めて効果的であった。

### 3. 相次ぐ中国武術代表団の来日

1974年9月，中国産業展の行事の一環として中国少年武術代表団（9歳から20歳までの男女40名）が来日し，日本武道館を皮切りに全国各地を巡って各種の拳法，刀，剣，槍，棒術などを披露，好評を博した[46]。これは，少年のみの武術演武であったが，新中国が日本で初めて現代武術運動の成果を問うた意義深い公演でもあった。

日中両国の文化，経済交流の発展とともに友好関係が日一日と深まっていくなかで，1977年9月，日中国交正常化5周年を迎えた。この年北九州で“中華人民共和国展覧会”が開催され，会に花を添えるべく中国武術代表団35名が来日した。その後この体表団は，福岡（9月23日），高松（9月25日），広島（9月27日），大阪（9月29日），名古屋（10月1日），横浜（10月4日），静岡（10月5日），東京（10月9日）と，各都市で行われた日中国交正常化5周年の記念行事に参加，中国全土から選りすぐられた精鋭たちの繰り広げる長拳，南拳，太極拳，形意拳，八掛掌，刀術，槍術，剣術，棒術，猿拳，三節棒，双剣などの演武は見る者を圧倒し，魅了した[47]。さらに1980年7月，中国武術代表団が来日し，「北陸中華人民共和国展覧会」の金沢開催に協力して武術公演を行った（7月27日東京公演，7月29日酒田公演，7月30日長野公演，8月2日，3日，7日北陸中国展覧会石川県公演，8月10日八戸市公演，8月14日古川公演，8月15日横浜公演，8月17日群馬公演，8月25日大津市公演）[48]。次いで，東京，酒田，長野，八戸，古川，横浜，藤岡，大津の各都市で中国武術基本動作，長拳，南拳，太極拳，通背拳，鷹爪拳，形意拳，太祖拳，少林白鶴拳刀術，槍術，剣術，棒術，三節棒，酔剣，三人対拳などを披露した[49]。その時のパンフレットには「優れた伝統と民族的風格をもった中国武術は，最近世界各国に紹介され，国際的にも評価が高まっております」[50] とある。

また，1982年11月，大阪府日中友好協会の招待を受けた，中国上海武術代表団22名が大阪（11月20日），高知（11月23日），徳島（11月24日），愛知（11月26日），三重（11月27日）の順で演武大会を開催した。延べ1万5千人の観衆を集めて中

国の伝統武術楊式太極拳，孫式太極拳，呉式太極拳，陳式太極拳，楊式太極刀，南拳，大刀，双剣，九節鞭，双鞭，酔拳，猿棒が紹介された。この年は，日中国交正常化10周年であり，1972年国交正常化以来，両国は，政治，経済，文化，スポーツなど各面の交流と協力において，非常に大きな展開をみた年でもあった[51]。

1984年4月には，中国武術チャンピオン代表団30名が東京（4月13日），山形（4月14日），郡山（4月16日），仙台（4月18日），札幌（4月21日），名古屋（4月25日），岡山（4月28日），神戸（4月29日），京都（5月3日），大阪（5月4日），福岡（5月6日）の各地で演武大会長拳，南拳，太極拳，形意拳，陳式太極拳，楊式太極拳，刀術，槍術，剣術，棒術，硬気功，双剣，双鈎，通背拳，八掛掌，酔拳，酔剣，双鞭，鷹爪拳，太極剣を披露した[52]。

1985年2月17日，日本武道館開館二十周年記念事業として第八回日本古武道演武大会・日中親善武道演武交流大会が開催された。その演武大会のパンフレットの中には「武道は平和建設への理想に通じております。はじめ戦闘の術として発生，発達を遂げた武道は，現在，人を作り，人をつなぎ，人を生かす道として世界の多くの人々の共感を得ており，国際友好，親善に大きな役割を果たしております。政治は国家間の利害の中で対立することが多いのでありますが，人間同士がナマでぶつかりあう武道は，相互理解を深め，友好，親善の大きな力となりうるのであります。このような折柄，日本と深い関係にある隣国・中国武術の最高峰をお迎えしてこの記念大会が開催されますことは，まことに意義深いものがあります。」[53] とある。このように，武術は戦闘の術を脱して，国際平和への道を開く重要な文化の一つであることが高らかに謳われている。正に，武術を通した日中交流の新時代の到来を告げるものと言ってよいだろう。このとき来日した中国武術代表団20名は，日本武道館が来日を要請した武術家何福生（雲南省武術協会出席），馬賢達（陝西省武術協会出席）と中国各地から選抜された選手から結成されたものであった。

### 4. 中国の武術家による日本滞在型の直接指導の開始

こうした機運を受けて，中国もまた太極拳の教師を日本に派遣して長期滞在し，直接教授するという活動を開始した。1960年代は日本での太極拳は，およそ普及しているという状態ではなかったが，1972年の日中国交回復後，日本と中国の武術太極拳界の交流は急速に進展した。特に注目されるのは，1977年秋，当時の飛鳥田横浜市長が上海からバスケットボールチームとともに太極拳コーチを招聘したこと，80年代始めにサントリーがテレビコマーシャルに太極拳を登場させたことで，これが日本における太極拳熱に火をつけることになった[54]。1977年には，上海から顧留馨，周元龍の両武術家が来日し，以来太極拳を中心にした，多くの武術指導者の来日が実現するようになった[55]。

1986年だけを取って見ても，中国武術協会や上海，江蘇，河南，北京，安徽，瀋陽，黒龍江などの地方から延べ100名以上のコーチと10以上の武術代表団が日本に招聘された[56]。また1984年6月「第一回全日本太極拳中国武術表演大会」の大阪市での開催から，1986年9月「第三回武術太極拳全日大会」川崎市での開催までの3年で，大会の参加人数は200名余りから一気に1,000名を上回るまでに増加した[57]。

こうして中国の武術家の来日を含め，日中間の往来が頻繁になるにつれて，それに伴う情報量も増大した。また，1974年中国武術チームの初来日以来，80年代半ばには日本に長期滞在する中国からの武術指導者は，常時10人ほどになった。その主なる人物を挙げるとすれば以下のとおりである。1985年4月から一年間東京太極拳協会の招きで太極拳指導のため来日し，1988年に再度来日して現在も日中健康センターで太極拳指導に当たっている李徳芳氏がある。彼女は簡化二十四式太極拳の編纂に当たった李天驥氏の令嬢である。また李霞氏は，1987年第一回アジア武術選手権大会（於 横浜文化体育館）の中国代表選手で，1988年3月，横浜中国武術協会の専任コーチとして来日，現在は日本ナショナルチームのヘッド・コーチとして活躍している。孫建明氏は1987年1月，東京太極拳協会の招きで日本を訪ね，太極拳の指導に当たってきたが，現在は李霞氏同様日本ナショナルチームのヘッド・コーチを勤めている。李霞氏と孫建明氏は1994年1月，日本選手の競技力向上のために貢献したとして，日本武術太極拳連盟より特別表彰を受けた。このように，日本にいながらにして中国人の専門家から真正

な技術を学ぶことができるようになったのである[58]。

かくして，日本における太極拳の技術レベルも急速に高まり，世界に羽ばたく日もすぐそこまでという情況が整えられることとなった。日本の太極拳は，言うまでもなく，中国の熱心なサポートなしには今日の隆盛を見ることはなかった。そして，やがて一人立ちするための全国統一組織の成立を見ることとなる。1987年の日本武術太極拳連盟の設立の前夜までの，日中太極拳交流の足どりは以上のようであった。

## VI. まとめと結語

以上述べてきた内容から日中太極拳交流と日本武術太極拳連盟設立前夜までの動きは以下のようにまとめられる。

1) 日中国交正常化以前の日中太極拳交流の始まりは，中華人民共和国政府「日中覚書貿易」を批准するための日本代表団との接触にあった。

2) そのときに紹介された太極拳は，中華人民共和国政府によって国策として推進された「簡化二十四式太極拳」であった。

3) 「簡化二十四式太極拳」は，中国共産党の主導のもとに伝統太極拳に改良を加え，人民・労働者のための新しい太極拳として提供されたものであった。

4) それはブルジョアによって占有されていた古い武術を新生・中華人民共和国の人民，労働者のために解放することをも意味していた。

5) そのためには，民族スポーツ研究会に始まり，中国武術協会を経て，武術管理センターの設立に至る長い「解放」の努力が必要であった。

6) こうした組織的な努力により「簡化二十四式太極拳」の誕生，普及そして隆盛が可能となり，日中太極拳交流の基盤を整えることができた。

7) こういう状況のところに日中国交正常化が実現し，相互の訪問が可能となり，多くの文化交流が繰り広げられることとなった。この追い風に乗って，日中太極拳交流もまた一気に盛んになった。

8) こうして「簡化二十四式太極拳」が日本に移入され，これを契機にして，日本太極拳協会が設立され，日本での普及の口火が切られることとなった。

9) 日中太極拳は大きく区分すると，三つの段階を経てきていることがわかる。第一段階は，日本からの太極拳留学の時代，第二段階は，相次ぐ中国武術代表団の来日の時代，第三段階は，中国の武術家による日本滞在型の直接指導の時代である。

10) 第三段階にいたって，ようやく日本の各地に普及しつつあった太極拳を統括する全国組織「日本武術太極拳連盟」を設立する機運が高まってきた。

## 注記および主な参考・引用文献

1) 本研究では，「太極拳」と「武術太極拳」の二重の用語が用いられているが，その理由は以下のとおりである。中国においては太極拳といえば，武術以外のなにものでもないが，日本に移入された当初は「健康体操」のイメージが強く，今日でもなお太極拳は武術ではなく体操であると受け止めている日本人は多い。日本では太極拳が広く行われるようになって，やく40年がたつ。近年では長拳，南拳や各種の伝統拳術が若い人々の間で行われている。中国武術は国際的には「武術」の中国語の発音，WUSHU（ウーシュー）の名称で普及している。太極拳は武術(WUSHU)の中の1種目であるが，日本では太極拳の愛好者人口が圧倒的に多いことから，太極拳と各種の中国武術，中国拳法を総称して，「武術太極拳」の名称で普及を進めている。そういう事情もあって，日本で協会や連盟を立ち上げるときの名称には「武術太極拳」とわざわざ「武術」を太極拳の上にかぶせるということが起こった。これは，中国的に考えればトートロジー（同語反復）である。しかし，最近の日本では「武術太極拳」という呼称が広く浸透し，一般にも広く認知されていると考えられる。したがって，日本の太極拳を強く意識するときには「武術太極拳」と表記し，中国のことを意識して記述するときには「太極拳」と表記することとした。

2) 1972年9月29日，北京で田中角栄首相が調印した「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」によって正式に日中両国の国交が正常化した。厳密には，1978年8月に調印された，日本と中華人民共和国の平和友好関係を強固なものにし，発展させることを目的とする「日中平和友好条約」以後とする説もあるが，こうした一連の動きの契機となったのは，いわゆる「ピンポン外交」(1971年4月7日，名古屋で開催された世界卓球選手

権大会に中国が復帰。好成績をあげると同時に，アメリカ卓球チームを中国に受け入れると発表。日本との交流も始める）である。

3) 中国文化大革命。プロレタリア文化大革命。文革とも略称。1966年秋に毛沢東が発動し，1976年まで中国で展開された「資本主義派打倒」をスローガンとする政治闘争。「四旧」（旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣）打破を掲げ，様々な文化遺産をはじめ，著書や記録などの破壊・破棄が行われた。このときの損失の大きさは計り知れないものがあり，太極拳に関する関連文書もまた，このときにほとんどを失われたというのが実情である。

4) 1950年10月1日，中華人民共和国は建国一周年を迎えた。その日，東京・一ツ橋の教育会館に，全国各地から各界各層の人々約千人が集まり，新中国の成立一周年を記念して日本中国友好協会（略称，日中友好協会）の結成大会が開催され，協会が創立された。

5) 各協会，連盟の議事録は，それぞれの機関誌『太極』『武術太極拳』の中にかなりのレベルで，詳細に公開されているが，「部外秘」に相当する部分は直接，議事録で確認する以外にない。

6) 笠尾恭二著，『中国武術史大観』，福昌堂，1994年7月20日，p. 618.

7) スポーツを通じた健康な生活を図ること。また，生涯にわたって健康な生活を送るためにスポーツ活動や心身の健康づくりが地域住民の自発性，主体性に基づき推進されるようスポーツに関する総合的な企画を行う「大衆性日常的スポーツ事業」の設置を提言。

8) 新体育社編「開展群衆性経常性的体育運動」（邦訳：「大衆性日常的スポーツ事業の展開」），『新体育』，青年出版社，1952年7月，第21号，p. 9.

9) 新体育社編，上掲誌，p. 9.

10) 栄　高堂，「為国民体育運動的普及和経常化而奮門」（邦訳：「国民のためのスポーツの普及と日常化への努力」），『新体育』，青年出版社，1952年7月，第21号，p. 15.

11) 栄　高堂，上掲誌，p. 16.

12) 張　軫，「関於整理和開展武術運動的幾個問題」（邦訳：「武術の整理と展開に関するいくつかの問題」），『新体育』，青年出版，1954年9月，第46号，pp. 9–10.

13) 武原，「記一九五三年全国民族体育表演及競技大会」（邦訳：「1953年全国民族スポーツ表演および競技大会」），『新体育』，青年出版社，1953年12月，第37号，p. 8.

14) 日本太極拳協会編，「太極拳は武術の花」，『太極』，機関誌，1975年8月，第9号，p. 9.

15) 李　天驥著，『太極拳の真髄』，BAB ジャパン出版社，2001年4月10日，p. 32.

16) 朱　徳は中華人民共和国成立後まもなく国家副主席を務めた。

17) 栄　高堂は中華人民共和国成立後まもなく体育総会の副会長を務めた。

18) 周　偉良著，『中国武術史』，高等教育出版社，2003年8月，pp. 120–121.

19) 中国国家体委武術研究院編，『中国武術史』，人民体育出版社，1997年9月，p. 365.

20) 劉　少奇は中華人民共和国成立後まもなく国家副主席を務めた。

21) 中国国家体委武術研究院編，前掲書，pp. 365–366.

22) 周　偉良著，前掲書，p. 122.

23) 周　偉良著，前掲書，p. 122.

24) 周　偉良著，前掲書，pp. 122–123.

25) 李　天驥著，前掲書，p. 260.

26) 松村謙三は戦後まもなく元の農林大臣と厚生大臣を務めた。

27) 古井喜実は元の法務大臣を務めた。

28) 李　天驥著，前掲書，pp. 260–262.

29) 楊　名時著，『太極拳・健康は日々の積み重ねが大切』，文化出版局，1986年12月8日，pp. 218–219.

30) 李　天驥著，前掲書，pp. 264–265.

31) 全日本太極拳協会編，『太極』，全日本太極拳協会機関誌，1985年7月，盛夏号，p. 10.

32) 中野春美は現在全日本太極拳協会本部の代表.

33) 中野春美，中川二三生，武田幸子，『武術』福昌堂，1978年10月，p. 70.

34) 片野隆夫は現在は中国武術気功整体の方面を中心に活動中.

35) 武田幸子「武漢国際太極拳・剣表演観摩会見聞記」『武術』福昌堂，1984年夏季号，p. 21.

36) 陳　家溝は中国，河南省温県にある．太極拳のメッカとして知られている.

37) 少林寺は中国，河南省登封県嵩山の西，少室山の北麓にある名刹．達磨が面壁九年して修禅し，北魏の孝文帝が496年に創建．少林拳発祥の地として有名．同寺で学んだ宗道臣は〈少林寺拳法〉を創始した.

38) 日本太極拳協会編，『太極』，機関誌，1976年8月，第12号，p. 5.

39) 日本太極拳協会編，『太極』，機関誌，1977年10月，第14号，p. 4.

40) 日本太極拳協会編，『太極』，機関誌，1978年9月，第16号，p. 5.

41) 全日本太極拳協会編，『太極』，機関誌，1980年艶陽号，p. 16.

42) 全日本太極拳協会編，『太極』，期間誌，1980

年全国大会号，p. 12.
43) 全日本太極拳協会編，『太極』，機関誌，1981年9月，爽涼号，p. 13.
44) 全日本太極拳協会編，『太極』，全日本太極拳協会機関誌，1980年，薫風号，pp. 2-3.
45) 日本武術太極拳連盟監修，『中国武術』，ベースボール・マガジン社，1989年7月号増刊，p. 96.
46) 鶴山晃端著，『中国拳法』，成美堂出版，1976年1月20日，p. 182.
47) 日本中国文化交流協会編集，『中国武術代表団公演』，日本中国文化交流教会，1977年9月，p. 1.
48) 日本中国文化交流協会，日刊スポーツ新聞社，北陸中華人民共和国展覧会協会「中国武術代表団－訪日公演」，日刊スポーツ新聞社，1980年7月.
49) 全日本太極拳協会編，前掲誌，p. 8.
50) 日本中国文化交流協会，日刊スポーツ新聞社，北陸中華人民共和国展覧会協会，前掲誌，p. 00.
51) 日本武術太極拳連盟監修，前掲誌，p. 96.
52) 日本武術太極拳連盟監修，前掲誌，p. 96.
53) 松前重義，「ご挨拶」『第八回日本古武道演武大会・日中親善武道演武交流大会』，日本武道館編集，1985年2月，p. 3.
54) 日本武術太極拳連盟編，『太極拳指導教本』，日本武術太極拳連盟，1999年4月，p. 4.
55) 前野慈作著，『日本人のための太極拳入門』，民衆社，1995年4月25日，p. 33.
56) 徐 才著，『徐才武術文集』，人民体育出版社，1995年11月，p. 81.
57) 徐 才著，上掲書，p. 81.
58) 池田郁雄編集，『中国武術』，ベースボール・マガジン社，1986年10月，p. 10.